

歌の周辺

歌集の冒頭近くに、切株を詠んだ歌が三首並んでいる。「切株の群れが月下に叫ぶこゑ聞ゆるごとし霜ふる山に」「切株に月しろく照りながき夜のけものは越えぬその切株を」の歌に続き、左の掲出歌がある。

冬山の切株や、そこに置く霜や、徘徊する獣など、すべて想像上のものばかりである。日ごろ、いろんな想念が湧き、湧いては消えてゆく。それら繋がりのない幾つかの想念を結び合わせて歌を作ることがある。そんなふうにして出来上がった歌だと思ふ。想念をイメージ化した作品と言えるかもしれない。

(高野公彦)



(写真・木畑紀子)

高野公彦うた紀行・9

切株に置く霜の円まおもひつつしののめ
眠るねむりはわが巢

——『汽水の光』

【鑑賞】巻頭「身熱」一連の最終歌。一連は故郷と少年期がテーマだが、掲出歌は、「切株」を素材とした三首中の一首なので、一連からは独立している。『汽水の光』には眠りに関する歌が多い。「切株に置く霜の円」とは冷たく、寒いイメージである。それを思う「ねむりはわが巢」は、これもまた冷たく、寒い。暗く長い夜に作者はいる。それは青年期を終えようとする精神そのものであった。

(影山一男)



ふるさとコレクション——180

左千夫の茶室（東京都江戸川区平井）

東京東部の下町にある平井の街。両国、錦糸町、亀戸など近隣の総武線沿線の街に比べると地味で目立たない印象だが、江戸時代には行徳（千葉県）の塩田で作られた塩を江戸に運ぶ街道が中川と交わる「平井の渡し」があり、浅草や成田山へ詣でる人々も行き来していた。古刹も多いがそのひとつ、「江戸名所図会」にも描かれている燈明寺には伊藤左千夫が設計したという茶室がある。

当時の住職は京都帝大出身の才人で文学者と交流があり、左千夫や正岡子規とも親しかったとのこと。左千夫は今の錦糸町駅前^{おおしま}に牧場を開き、終の棲家はここから徒歩十分ほどの江東区大島にあった。「茶博士」と呼ばれるほど茶が好きだったという。

現在は茶室として使われていないとのこと、内部を見ることはできない。また壁などの様子からすると当時の建物がそのまま残っているわけではないようだが、ここに左千夫や子規らが集って歌会を開いたこともあったと知り、地元の意外な歴史に嬉しくなった。

（写真・解説 前中 映）